
うたいつづけるとき。

万里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うたいつづけるとき。

【Nコード】

N1473K

【作者名】

万里

【あらすじ】

「生きている意味がわからない」

私はずっと知ってた。あなたの生きる意味……。

ガシャーン、と窓ガラスの割れる音。

「キヤー!!」

という女子の悲鳴が響く。

フラリと立ち上がった悠真。その手は血で染まり、髪の色と同じ赤色になっている。

「やめなさい!」

先生が机の隅に隠れながら叫ぶ。しかし、悠真は近くにあったイスを蹴ると、キツと先生を睨んだ。切れ長の瞳は、おびえる人々を映していた。

「ふざけるなよ」

悠真が小さくつぶやくのが聞こえた。そして彼は、自分の机から力バンを取り上げると、さっさとどこかへ行ってしまった。

土手道を歩くと、あの歌が聞こえてきた。私は足を止めた。

優しくて透き通る声。懐かしく胸に響いてくる。

歌声のほうに導かれ歩いていくと、そこに声の主はいた。草原に寝転び、空を見上げながら歌っていた。

「・・・変わらないね」

私の声に反応した主が起き上がる。緑色の草が、赤毛に絡まっていた。

「彩菜・・・?」

「悠真。やっぱりここにいたんだね」

悠真は、小さいころから無愛想だった。自分の感情のコントロールが上手にできないのだと思う。笑ったことなんて、あまり見ない。しかし、歌声はすごいキレイだった。いつも決まって同じ歌を、澄んだキレイな声で歌う。それはとても心を揺さぶるもので、初め

て聴いたときは、思わず泣いてしまった。

「ねえ、もう一回歌って!」

「ヤダ」

断られるのはいつものことだった。

「じゃあ、何で歌うの?」

私の問いかけに、悠真は黙って考え出した。

「………なんにもできないから」

「えっ?」

その後、私たちは何も話さなかった。

なんにもできないから……。

それはどんな意味だったのだろう。

そう考えながら歩いていると、ポツポツと雨が降り始めた。カバンの中から折りたたみの傘を取り出して気がつく。

「悠真、傘持ってたかった……」

でももう帰っているだろう、と歩き始めた時、頭の中にあの歌が流れ始めた。

私の足は、悠真のもとへ向かっていた。

「悠真――!!」

私が叫ぶ声は雨に消される。けど、あの声は響いてくる。

「悠真!」

悠真はずっと歌っていた。雨の中。静かに泣きながら……。

私は悠真を傘の中に入れた。

「風邪、引くよ?」

歌声が止まる。見つめ返された瞳が、とても寂しかった。

「オレ……」

悠真の澄んだ声が心の隙間に入り込む。

「生きている意味がわからない」

一瞬、雨の音がまったく気にならなくなった。目を、そらされる。
「進むことも止まることも怖い。それなのに……。生きてる意味もないのに、死ぬこともできない」

「……そんな悲しいこと言わないでよ！」

私は、悠真を抱きしめた。

「彩菜？」

私は泣いた。雨にも負けないぐらい、大粒の涙を流した。
すると、悠真の手のひらが、私の頭をなでた。

「彩菜……」

頭をなでってくれるその手のひらも、私の名前を呼ぶその声も、全部温かい。

「悠真は、歌うために生きてるの。……そう、歌うためだよ！だから、うたって。……歌って！」

それは決してキレイごとなんかじゃなかった。心の底から込み上げてきた想いだった。

悠真はゆっくりうなずくと、雨の降る空に向かって歌いだした。

「彩菜、見て」

気がついたら雨は止んでいた。悠真に言われ、顔を上げる。

「……すごい、虹だ！」

夕焼け空に、大きな虹が架かっていた。

「キレー！」

と私が感動していると、横でクスツと笑い声がした。悠真のほうを見ると、彼も虹を見て笑っていた。

ずぶぬれの悠真と私。

「ねえ、悠真。もう一回歌って」

私が言くと、悠真は返事代わりに、透き通る声で歌った。

どこまで響くその声で、ずっと歌い続けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1473k/>

うたいつづけるとき。

2010年10月28日07時46分発行